木摺り下地への漆喰仕上げ

近畿壁材工業の社内勉強会一例

匠に役立つ社内勉強会レポート

左官材料メーカーとして材料を販売する立場から伝統左官工法について毎月勉強会を行っており、その内容をレポートとしてまとめた社内資料です。

■木摺り漆喰工法

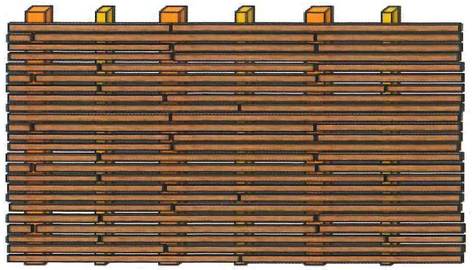
木摺り下地漆喰工法は、木舞荒壁下地が主流の時代、数奇屋建築など柱の細かい箇所では一部使用されていた程度でしたが、明治期に入り西洋の文化が普及するようになり、真壁から大壁へと建築様式が変化することで導入されるようになり。明治中期には洋風建築の普及により、木摺り下地が建築下地の一般的工法として使用されるようになりました。

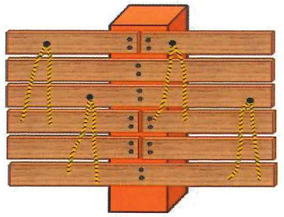
■木摺り下地とは

木摺り板は、小舞荒壁下地に利用される竹に比較して剛性が高く安価で加工しやすい材料としてその性能が認められております。漆喰の付着をよくするために目透かしを行い、柱や間柱に細かく釘止めし取り付けていきます。材質は杉板を用い心去り材で製材後 1 ヶ月以上経過し、なるべく乾燥しそりが少ないものが適しています。一般的には、木摺り板を取り付ける受け材は柱・間柱・野縁で可能ですが、必要に応じて受け木を使用する場合もあります。

木摺り板は厚さ 15 ㎜～20 ㎜、幅 40 ㎜、長さ 1.8m～2m サイズとし、取り付けは約 7 ㎜程度間隔の目透かしを設けて柱に横貼りし釘止めしていきます。釘は木摺り板から受け材に 2 本ずつ打ち込み、継ぎ手は受け材の芯で 6 ㎜位の目透かし継ぎとし、6～10 枚ごとに乱継ぎにします。

特に取り付けは仕上げ材にひび割れ剥離が起こらないように、あらかじめ歪を取り、目違いなく取り付け面が平らになるようにします。



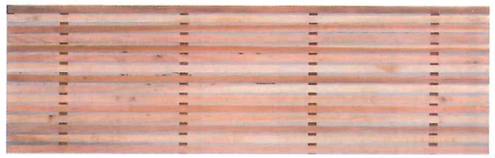


■木摺り用パネル

≪柱間 6 尺（910 ㎜）用≫

サイズ

標準・・・600×1814 ㎜



■木摺り工法の検証

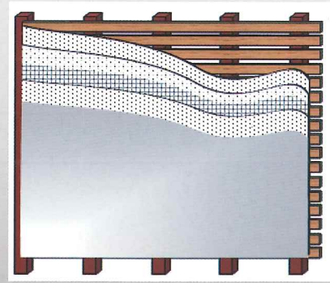
城かべ中塗用を使用の場合

城かべ中塗用で試験を行いました。1 回約 4 ㎜厚 3 回塗り（約 10 ㎜厚）で仕上げました。10 ㎜厚の場合 1 ㎡に城かべ中塗用 1 袋必要です。施工性と亀裂防止などを考え、薬すさを城かべ中塗り用 1 袋に 250g 程度入れることで改善することができました。

木摺り漆喰（ドカッと）使用の場合

木摺り漆喰は 1 度に 10 ㎜と厚付けすることができました。10 ㎜厚で施工の場合 20kg1 袋で約 1.2 ㎡塗ることができ、塗りつけの際にダレもなく 1 度に厚塗りが出来ることから施工性が良好な漆喰でした。城かべ中塗用に比べて木摺り漆喰は硬化もはやく、1 度に塗りつける事が出来るので時間が短縮につながります。

■まとめ

城かべ中塗用の場合も木摺り漆喰の場合も下地として 1 回目 10 ㎜厚塗り城かべネットを見えなくなるまで伏せ込みます。完全乾燥後、2 回目 10 ㎜塗り 20 ㎜程度の塗り厚にします。

その後、中塗りから上塗り工程に進みます。木摺りは石膏ボードなどと同様下地としてご理解下さい。